

お茶の時間

植物の毒

動かないが故の戦略

喜田 邦彦 陸自66

『偕行』の編集は、投稿者の年代が幅広いので、言葉づかいから句読点まで、迷いに迷う。刷り上がったゲラを読み返しては大いに悔やむ。非才の身には、一服のお「茶」がありがたい。

「茶」の漢字は、煩惱の数「百八」を意味する。「十」を二つ並べた「草かんむり」に、八十八を書き足せば「茶」の文字になる。お茶を飲めば、百八の迷い（煩惱）が悟りに至る縁になるとか。気持ち静め（諦め）、迷いを解き（投げ出し）、気分を転換してくれる（まあいいか）茶の効能は、日本人（凡人）のよく知るところ。

そうした気分させる「茶」の成分は、カテキン・カフェイン・テアニン・サポニン等である。植物が作る化学成分は、人類が登場した時から「薬」として使われてきた。これらの植物の発見は偶然だったろう。多様な植物をかじったり、煎じたり、干したりした結果、「薬」になる成分が見つけた。紀元前4千年のメソポタミアの粘土板に、「薬」の記述がある。

『植物はなぜ薬を作るのか』（斎藤和季 文春新書）から引く。答えは、

「植物は動かない」ため。自分の力で移動して生息域を広げることはできないし、外敵に捕食されそうになっても逃げだせない。この「動かない」選択をした植物が、上手に生き延び、効率的に繁殖するため、「毒」を作り出してきた。

山菜で人気のワラビやゼンマイにはアルカロイドがあり、生で食すると吐き気を催す。それらの「えぐみ」は動物には「毒」であり、人間はそれらを抽出して「薬」や「食物」にした。

しかしその「毒」は、植物自体に自家中毒も引き起こす。かつてセイタカアワダチソウが大繁殖したのは、他の植物の発芽や生育を邪魔するアレロパシーの働きによった。だが、原産地の北米大陸では減少し、小型化している。ほとんどの植物は、こうした化学物質を持っていて、地面の下で「化学戦争」を繰り広げているようだ。

このような仕組みが、ゲノム科学の発展により遺伝子レベルで突き止められたのは、2000年代に入ってから。中国からの輸入が困難になりつつあるカンゾウ（甘草）の成分も、人工的に生成が可能になった。

植物にも化学式にも疎い編集子にとつて、奥深い植物の生命力の強さを思い知らされた。「おーいお茶」などと、気軽に呼ばさせない神秘性すら感じさせる一服休憩となった。